

世界を本当に支配しているのは誰か？

【訳者注】いわゆる「グローバル・エリート」について解説したいくつかの記事の中で、この論文が最も充実していると思われる。腑に落ちなかったいくつかの点が、これで腑に落ちたと言う読者も多いであろう。特に“彼ら”の学界への浸透について、ここに書かれているようなことを知っていたという人は、まれであろう。Full Spectrum Dominance (全方位支配) と彼らが言う意味がよくわかって、恐ろしいではないか。

イルミナティ教育の驚くべき特異性については、一番下までスクロールダウンして、2/26 (2013)「前イルミナティ、マインドコントロール・プログラマーの告白」を併せ読んでいただくと、より明瞭な実態が浮かび上がると思われる。

また「Post-2012 world」参考資料を、やはり一番下までスクロールすると、ここに触れている John Coleman による「イルミナティ 300 人員会の 21 項目の目標」(2012/6) が出てくる。

By Prof. Dr. Mujahid Kamran

Global Research, April 26, 2015



私が政界に入って以来、私に個人的な打ち明け話をする人たちが何人かいた。アメリカの商業や製造業に携わる大物たちの一部は、何かを恐れている。彼らはどこかに、非常にうまく組織され、敏感で、用心深く、相互に絡み合い、完全で、隅々まで浸透している権力集団があつて、それを非難して話すようなときには、声を潜めた方がいいことを知っている。——ウッドロー・ウィルソン、28代米大統領 (1856 - 1924)

だから、親愛なる Coningsby さん、世界は、我々がちょっと想像できない人たちに支配されていて、背後にいる人でなければ、それが誰かわからないのです。

——ベンジャミン・ディズレーリ、英首相 (1804 - 1881)

過去 300 年間に起こった、産業革命、高利に基づく銀行システム、それに科学と技術の進歩の 3 つが、3 つの主要な結果をもたらした。一握りの人々の手にとつてい信じられないほ

どの富を集中させたこと、最後は大量破壊兵器に至るような、ますます恐ろしい兵器を作らせたこと、それに、メディアと教育システムのコントロールを通じて、科学技術の応用による大多数の人々の考え方の画一化が可能になったこと、である。

この地球上の最も富裕な人々は、彼らが起こすあらゆる大きな擾乱の采配を振るっている。彼らの活動の範囲は地球全体、さらにその先まで及んでいる。彼らの野心と、富と権力への食欲さは、とどまるところを知らない。そして彼らにとっては、人類の大部分はゴミ、すなわち“人間ゴミ”である。また彼らの目標は、地球の人口を大幅に減らすこと、現在よりもはるかに少ない状態に保つことである。

Nathan Mayer de Rothschild 男爵（1840 - 1915）は、かつてこう言った——「私は、太陽が沈むことのない大英帝国を治める英国の王座に、どんな操り人形が据えられても構わない。イギリスのカネの供給を支配する者が、英帝国を支配する者であり、イギリスのカネの供給を支配しているのは私だ。」

英帝国について言えることは、連邦準備システムを通じて、ロンドンを本拠とする「エリート」たちに遠隔操作された、アメリカ帝国についても言える。その結果から判断するなら、連邦準備システムは人類史上、最大の信用詐欺である。

人間の最も美しい構築物であり、地上の力と豊かさの根源である科学的知識、すなわち人間に内在する思考と驚きと畏怖の能力が組織された、最も荘厳で、強力な科学的知識が、人類を隷属させる道具となり、ごく少数の者たちの握る非常に危険な道具になったということは、悲しく痛ましい事実である。これらの人々は科学者を“雇い”、当然の権利のように、彼が彼の発明を通じて創りだした力を奪い去るのである。そこでその力は、人類にとって計り知れない人的・物的な犠牲のもとに、彼ら自身の目的に利用される。この一握りの人々、地上で最も富裕な家族の構成員、「エリート」たちの目標は、彼らの支配する **New World Order**（新世界秩序）、“ひとつの世界政府”である。

秘密性と匿名性は、この「エリート」の活動にとって、絶対的非情、深い欺瞞、それに最も汚いスパイ行為やゆすり行為と共に、本質的なものである。エリートたちは、諸国家を対立させ、宗教や他の伝統的価値の破壊を目指し、混乱をつくり出し、意図的に貧困と悲惨を拡大し、政権を奪って自分たちの手下をその跡に据える。これらの家族は「血がまだ通りを流れている間に買う」（ロスチャイルドの言葉）ことを方針としている。戦争、“革命”それに暗殺は、彼らの戦術の一部であり、その目的は、何世代かかっても、伝統的文明や伝統的宗教（ソ連のように）を破壊すること、富と権力を蓄えること、敵対者を滅ぼすこと、誓った目標に無慈悲に突き進むことである。彼らは、隠れた、また公然の、結社や組織を通じて活

動している。

Carroll Quigley 教授はこう書いている——

金融資本主義の権力者たちは、もう一つ別の遠大な目標をもっていた。それは、金融支配を個人の手握る世界的システムをつくり出し、各国の政治と世界全体の経済を支配することであった。このシステムは、封建制度のように、私的な会合や会議で得た秘密の合意によって歩調を合わせて活動する、世界の中央銀行によって統制されるべきものであった。…金融資本主義の成長は、世界の経済統制の中央集権化と、この権力を、資本家の直接の利益のため、他のすべての経済グループの間の損失のために、使うことを可能にするものだった。

ウィンストン・チャーチルは、結局「こうしたすべてに飽き飽きして」1920年にこう書いた——

ワイスハウプト (Weishaupt) 別名スパルタクスの時代からカール・マルクス、トロツキー、ベーラ・クン、ローザ・ルクセンブルグ、そしてエマ・ゴールドマンの時代に至るまで、発達の停止、羨望的悪意、不可能な平等を根底にもつ、文明の転覆と社会の再建を狙ったこの世界的な陰謀は、着実に成長してきた。それはフランス革命の悲劇において、明瞭に認識できる役割を果たした。それは19世紀間のあらゆる転覆を図る運動の主導力であった。そして今ついに、欧米の偉大な都市の暗黒世界からきた、正常でない人物たちが、ロシア人たちの髪をしっかりとつかみ、現実にあの巨大な帝国の、異議を挟めない主人となった。

J・F・ケネディによって暴かれた高級陰謀団

チャーチルが、人類史上前例のない流血をもたらした“高級陰謀団”の存在に言及したのは、第二次大戦の暗い時代だった。チャーチルはまた、「エリート」のことをこういったと言われている——「彼らはレーニンを、ペスト菌のように、密封したトラックに乗せて、スイスからロシアに運んだ…」(John Coleman, *The Tavistock Institute of Human Relations*, Global Publications, 2006による) ——「彼ら」とは誰か？

米大統領ジョン・F・ケネディの、メディア関係者を前にした、1961年の演説を考えてみよう——

秘密という言葉は、自由で公開性の社会では嫌なものです。そして我々は、一つの国民

として、本性として歴史的に、秘密結社とか、秘密の誓約とか、秘密の行動といったものには反対しています。というのは、我々は世界の至るところで、主に隠れた手段によってその勢力範囲を広げようとする、一枚岩の無慈悲な陰謀の敵にされているからです。それは侵略でなく密かな潜入、選挙でなく転覆、自由な選択でなく脅しを用いています。それは膨大な人的・物的資源を糾合した組織であり、固く結ばれた、高度に有能な機構によって、軍、外交、情報、経済、科学、政治の、あらゆる活動を一つに結ぶものです。その犯罪行為は隠されて公表されません。その過ちは隠ぺいされて新聞には載りません。そしてそれに反対する者は黙らされ、褒められることはありません。いかなる支出も疑問にされることなく、いかなる秘密も顕れることはありません。…私はあなた方において、アメリカ人民にこれを知らせ警告する、この大変な仕事を手伝っていただきたいのです。

秘密結社、秘密の誓約、秘密の行動、ひそかな潜入、転覆、脅し——これらは J・F・ケネディの用いている言葉である！

1963年6月4日、JFKは連邦準備銀行の紙幣に代わる、財務省のドル札の印刷を命令した（大統領令 11110号）。彼はまた、ひとたびこれが印刷されるならば、連邦準備紙幣は撤回され、財務省紙幣が出回ることになると言った。数か月後（1963年11月22日）、彼は白昼、全世界の目前で、頭を撃ち抜かれて殺された。後継者のリンドン・ジョンソン大統領が権力を握ると同時に、財務省紙幣への切り替え命令が撤回され、なぜ JFK が殺されたのかの理由が明らかになった。JFK のもう一つの命令、ベトナムからアメリカの“アドバイザー”を引き上げることによって極東から軍事的に手を引くという方針も、彼の死後、直ちに撤回された。キューバ危機の後、JFK は、ソビエト連邦との非対決的な平和共存を求め、それは世界から戦争をなくすることを意味した。彼は次の戦争は核戦争で、勝者はいないことを知っていた。

防衛産業と、戦争からカネを儲ける銀行は「エリート」特有のものである。「エリート」は、Anton Sutton が指摘したように、ヘーゲル流の弁証法哲学をもっていて、そのもとで彼らは“コントロールされた紛争”をつくり出している。2つの世界大戦は、“コントロールされた紛争”だった！ 彼らの傲慢、彼らの尽きないエネルギー、彼らの焦点、人命の完全な無視、何十年も前から計画し、その計画を実行する彼らの能力、そして彼らの成功は、人を圧倒し信念を揺るがすものがある。

ディズレーリ、ウィルソン、チャーチル、JFK、その他の人々の言葉は、世界を支配する者たちについて言われた、全く間違いのないものである。フランク・D・ルーズベルト大統領は、1933年11月、エドワード・ハウス大佐にこう書き送った——「問題の真相は、あなた

も私も知っているように、より大きな中心にいる金融関係者が、アンドルー・ジャクソンの時代以来ずっと、政府をわがものにしてきたことです。」アンドルー・ジャクソン米大統領（1829 - 1837）が、銀行家たち（ロスチャイルドなど）の策謀に激怒して、こう言ったことを思い出していただきたい——

君たちは蝮の巣だ。私は君たちを追い出すつもりだ。永遠の神にかけて君たちを追い出すであろう。もし人民が、我々のカネと銀行システムの、腐敗した不正を理解さえすれば、今日中にも革命が起こるであろう。

エリート支配の絡まり合いの構造

Dean Henderson は、その著『ペルシャ湾の大石油企業と彼らの銀行家——4騎手、8家族、および彼らの地球的情報網、麻酔剤、恐怖のネットワーク』の中でこう言っている——「トップ 25 社のアメリカの銀行保有会社の株式所有に関する、銀行統制部局への私の質問は、〈情報の自由〉法の扱いを受けたが、やがてそれは“国家的安全保障”という根拠のもとに拒否された。これは、銀行の株主の多くがヨーロッパ在住であることを考えれば、皮肉な話である。」これは表面的には全く驚くべきことだが、いかにアメリカ政府が、人民のためでなく、「エリート」のために機能しているかを示すものである。それはまた、秘密性が「エリート」に関しては、絶対命令であることを示している。いかなるメディアもこの問題を持ち出さないのは、「エリート」がメディアを所有しているからである。秘密ということが「エリート」の支配には絶対条件である。もし、世界が「エリート」の富、計画、イデオロギー、活動について真実を知ったならば、これに対する世界的な反乱が起こるであろう。ヘンダーソンはさらにこう述べている——

銀行業の「4騎手」（バンク・オブ・アメリカ、JP モルガン・チェイス、シティグループ、およびウェルズ・ファーゴ）は、石油業の「4騎手」（エクソン・モービル、ロイヤル・ダッチ/シェル、BP アモコ、およびシェブロン・テクサコ）を所有している——他のヨーロッパや昔のカネの怪物たちと共に。しかし彼らの地球経済に対する独占は、石油の境界で終わっているのではない。銀行業の 4騎手は、「フォーチュン」誌に載る 500 企業のほとんどすべての、トップ 10 株主に入っている。

よく知られていることだが、2009 年には、世界のトップ 100 の最大の経済実業者のうち、44 が企業だった。これらの家族は、このそれぞれのトップ 10% の株主の中に入っているが、彼らの富は、国家経済をはるかに超えている。実は、世界の GDP の総計は 70 兆ドル前後であるが、ロスチャイルド一族の富だけで、数兆ドルと見積もられている。ずっとロスチャイルドに助けられ、カネの供与を受けてきたロックフェラー族についても、同じである。

アメリカの年間 GDP は 14-15 兆ドルの範囲にあるが、これは、これら兆ドル長者の富の前には顔色をなくする。米政府とほとんどのヨーロッパ国家が、「エリート」たちに負債があることを考えれば、誰が世界を所有し、誰がそれを支配しているかについて、全く疑問の余地はない。Eustace Mullins の本 *The World Order* から引用する——

エリートたちは、彼らの財団、外交問題評議会（CFR）、連邦準備システムを通じて、彼らの権力への挑戦もほとんどなしに、アメリカを支配している。巨額の“政治的キャンペーン”は、「新世界秩序」の計画に忠誠を誓った、注意深く選ばれた候補者によって日常的に行われている。その者が万一、そのプログラムを逸脱すれば、彼らは“事故”に遭うか、セックス問題にはめられるか、何かの金銭的不明朗で起訴される。

「エリート」のメンバーは、完全に協調して、公共の利益に反して活動をする。彼らの活動は、個人が自分のもって生まれた創造性を発揮することが自由な、戦争や流血のない、人類にとってよりよい生活を妨げる活動である。アメリカの初代の国防長官であった James Forrestal は、「エリート」の陰謀に気づき、Jim Marrs によれば、本を書くのに使うための 3000 頁ものノートを書き溜めていた。彼は不可解な状況で死に、ほとんど確実に暗殺だった。彼のノートは持ち去られ、一年後に、衛生無害となった版が出版された！彼の死の少し前、朝鮮戦争が勃発する 15 か月も前に、彼は、アメリカの兵士たちが朝鮮で死ぬことを明かしていた！ マーズがフォレストルの言葉を引用している——「これらの人々は無能でも愚かでもない。首尾一貫性が愚かさのしるしだったことはない。もし彼らが単に愚かだったとしたら、時には失敗して我々に有利に展開しただろう。」ビルダーバーグ・グループ、外交問題評議会、日米欧三極委員会、それにこれらすべての母である王立国際問題研究所は、人類の未来について決定を下す機関である。誰がこれらをお膳立てし、コントロールしているのか？ もちろん“国際銀行家”たちである。

Fletcher Prouty 大佐は 1955-1963 年の間、米大統領のブリーフィング室長だったのだが、彼は著書 *The Secret Team: The CIA and Its Allies in Control of the United States and the World* の中で、「ある新しい宗教団体の内部の聖室」について書いている。「聖なるチーム」という言葉で彼が言っているのは、「政府の内外の、安全保障上問題のない個人たちで、CIA や国家安全保障局（NSA）の集めた秘密情報のデータを受け取り、それらに反応する人々」のグループのことである。彼はこう述べている——「このチームの権力は、その広大な政府内部の隠れた内部構造、その私的な大企業、相互間の基金や投資銀行、大学、ニュースメディア、また国内外の出版社などとの、直接の関係からきている。」彼は更にこう付け加えている——「このチームの真のメンバーは、現行の政権の職についていても、職の外にいて現実問題と取り組んでいても、すべて権力の中枢にいる人たちである。彼らは官職とビジネスの世界、あるいは快適な大学の世界の間を、行ったり来たりしている。」

若者を訓練してエリートの仲間に入れる

非常に驚くべきことは、“彼ら”がどうして統制を及ぼすことができるのか、どうして仕事をやってくれる人々を“彼ら”は常に見つけるのか、どうして“彼ら”は常に正しい時に“正しい”決定をするのか、ということである。これは、ある隠れたプログラムがあって、中心となる要員を、精神的に、イデオロギー的に、哲学的に、心理的に、かつ能力的に訓練して、長い期間にわたって適正化し、アメリカや英国などの国家の権力中枢に、彼らを据えるのでなければ、全く不可能なことである。この訓練は、一般に幼少の時代から始まるのであろう。また、世界の主たる権力中枢に据えられる“彼らの”要員たちの状況対処能力の、高度に優れた技術をもった小グループによる、継続的な査定の方法が存在しなければならない。彼らは直ちに“救済”行動、つまり常に「エリート」の利益となる行動を取らねばならない。どうやってそういうことが可能なのか？

秘密結社と、その——特にアメリカの——大学支配がより深い意味を帯びるのは、こうした疑問への答えを見つけたときである。アントニー・サットン、ジョン・コールマン、ユースタス・マリンスといった人々による仕事は、突破口を開くものである。人類は、真理のために迫害されるが屈することのない、こうした学者たちに感謝すべきである。大きな戦争を始める、未来のための政策を決定する、人類に対する「エリート」の支配を強化する、といったことを狙う重要な率先事業のカネの出所を求めると、あなたは常に、それらがいわゆる銀行業家族と、彼らの「財団」によって活動している彼らの手下に、つながっていることを発見する。

2008年4月、私は、ワシントンDCの米務省で行われた、2日にわたる「地球の発展のための高等教育サミット」に、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカの、ほぼ200名の大学総長・副総長の中にいた。このサミットでは、コンドリーザ・ライス国務長官を含む、5人のアメリカの長官による演説があった。このサミットの本当の強調点は、たった一つのこと、つまり**発展途上国の大学は、地球的な問題が解決できるように、「財団」と組んで活動すべきだということだった！** これらは私的財団であり、この強調を理解する方法はただひとつ、米政府が、これらの財団を所有している者たちによって、所有されているということを理解することだ。ついでに言うと、開会スピーチは、ルワンダで何百万の人を殺し、アメリカの軍事施設で訓練を受け、博士号を得た戦争犯罪人、ポール・カガメ博士によってなされた！ 最初のプレゼンテーションは、Agha Khan財団の理事長によって行われた！

イエール大学の秘密結社「スカル・アンド・ボーンズ」に関する魅力ある研究で、アントニー・サットンは、この一つの結社の、深く重要な数多くの面を明らかにしている。彼の著書

*America's Secret Establishment—An Introduction to the Order of Skull and Bones*において、サットンは、「スカル・アンド・ボーンズ」団体を支配している一組の「古いアメリカの家系と新興金持」があると指摘している——すなわち、Whitney 家、Stimson 家、Bundy 家、Rockefeller 家、Harriman 家、Taft 家、Bush 家、等々。彼はまた、イギリスとの関係もあると指摘している——

この団体とイギリスは、Lazard Freres や個人的な商業銀行家を通じてつながっている。特筆すべきは、イギリスの組織が一つの大学——オックスフォード大学、特にオックスフォードの All Souls College——を創設したことである。イギリスの組織は“ザ・グループ”と呼ばれている。ザ・グループは、イギリスのロスチャイルド家を通じて、ユダヤ人の同調者につながっている。アメリカの団体は、Guggenheim、Schiffそして Warburg 家につながっている。…そこにはイルミナティとのつながりがある。

1832 年以来、毎年、15 人の若者が——ごく最近では女性も含めて——イェールの学生の中から選ばれて、この団体に取り込まれている。誰が彼らを選ぶのか？ これら“選ばれた者たち”の多くの、その後の経歴を追跡して調べてみると、彼らがいかにアメリカ人として出世していくか、いかに彼らが、アメリカの重要な機関の中核そのものへ入り込むように、彼らの仲間が取り計らっているかがわかる。この人たちは、戦時も平時も、常にカギ的な地位にあって、たえず彼らを操作し監視している。

エリート家系の、国家の思考過程に対する影響力は、メディアだけでなく、大学の機関や組織を通じて浸透するように仕組まれている。サットンはこう書いている——

アメリカの学術団体の中でも、アメリカ歴史学会、アメリカ経済学会、アメリカ化学会、アメリカ心理学会などは、すべてこの団体 (Skull and Bones) のメンバーか、この団体に近い人物によって発足している。これらは社会の条件付けにとってカギとなる学会である。この団体がこの学界の場面に**最初に**現れた事例は、特にそのメンバーが名を連ねている「財団」の間に見られる。…ある影響力をもつが、ほとんど知られていない、1910 年に設立された組織の**初代**の会長もまた、この団体メンバーであった。1920 年に、Theodore Marburg が、「紛争の法的解決のためのアメリカ学会」を創設したが、マーバークは会長に過ぎなかった。**最初の**議長は団体メンバーの William Howard Taft だった。この学会は「平和を強制する連盟」(League to Enforce Peace) の先駆となったが、これが「国家聯盟」(League of Nations) の概念へと発展し、究極的に「国連」(United Nations) になったものである。

国連とは、「エリート」のコントロールのもとで、“ひとつの世界政府”の設立を容易くする

ように計画された、「エリート」の機関である。国連の建物は、ロックフェラーの所有地の上に立っている。

New World Order に奉仕する将来の首相を選ぶ

David Icke (アイク) は、論文「オックスフォード大学——イルミナティ養成所」(OU: The Illuminati Breeding Ground) で、これらの秘密結社やグループが、いかに「エリート」のために働き、彼らの仲間を主要な地位につけようと訓練し計画しているかを証明する、ある出来事を語っている。1940年にある若者が、オックスフォードのユニバーシティ・カレッジの一室で、労働党の“研究グループ”に向かって演説した。彼は、自分が名前のないある秘密グループに属していて、このグループは英議会や行政官庁に潜入することによって、イギリス、ローデシア、および南アフリカの“マルクス主義的占領”を計画しているのだと強調した。イギリス人は過激主義者を好まないため、彼らを批判する者たちを“右翼”として退け、自分たちを“穏健派”だと称する。この若者は、自分はこの秘密グループの政治的部門を率いていて、いつかイギリスの首相になる予定だと話した！ 彼はイギリス首相(1964-70、1974-76)になったハロルド・ウィルソンだった！

アイビー・リーグや他の大学で勉強するすべての若者は、一部の教授から絶えず観察されていて、彼らの中から将来「エリート」に奉仕し、絡み合った、隠れた、または公開の結社や組織のネットワークの一部となって、「新世界秩序」のための働いてくれる人物を探していることを忘れてはならない。中にはすでに選ばれていて、彼らと一緒にいるが、心の中では、すでに前から使命感をもっていて、この結社に所属しているという意識によって、一線を画している者もいるだろう。これらの若者もまた、自分は出世街道を用意されているが、もし怯んだりしたら、殺されることもあることを知っている！

完全な秘密性と絶対的忠誠が、このプログラムが継続的に成功するためには、不可欠である。これは、殺人や破産の恐怖、またおそらく、ピラミッドかそれ以前の時代にまで遡る宗教儀式によって、強制されている。哲学的には“彼ら”はヘーゲルの弁証法を信じ、これによって恐ろしい戦争をもたらすことを正当化している——これは“コントロールされた紛争”という美名で呼ばれる。彼らの政治的イデオロギーは“集団主義”で、それによって人類は、あるグループ——その目的のために組織された、隠れた“少数支配者”——に“操作”されなければならない。“彼ら”は、自分たちが、通常の人間より知恵があると信じている。イルミナティ、フリーメイソン、その他、既知または未知の秘密結社のメンバーたちは、すべてが人類史上最も富裕な陰謀団のもとに結束して、催眠術をかけられ、眠りこけ、打ちのめされた人類を、一つの地獄から次の地獄へと連れ回している。かつてMI6(英情報部)の要員だったジョン・コールマンは、この巨大な地下の人間機関をコントロールし指導する

“300人委員会”について語っている。

デイヴィド・ロックフェラー Sr. は、2002年に出版された『回顧録』(*Memoirs*)で、彼の家族が一世紀以上にわたって、“イデオロギー的過激派”によって攻撃されてきたと述べている——「ある者たちは、我々が、アメリカの最上の利益に反して活動する陰謀団の一部だとさえ信じ、私の家族と私を“国際主義者”だと性格付け、世界中の他の人たちと共謀して、より統合された地球規模の、政治・経済的構築物——“ひとつの世界”と言ってもよい——を作ろうとしていると言って非難している。もしそれが非難なら、私は罪人である。」

(ムジャヒド・カムラン博士は、パキスタン、ラホールのパンジャブ大学副総長。彼の著書 *The Grand Deception—Corporate America and Perpetual War* は、パキスタン、ラホールの Sang e Meel Publication から出版され、www.amazon.co.uk から入手できる。カムラン教授のウェブサイトは www.mujahidkamran.com)